

# ～社会的ひきこもり支援～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名： 社会的ひきこもりの回復過程の考察及びロールモデルの作成  
研究代表者：社会福祉学部 講師 川乗賀也  
課題提案者：盛岡市役所市民部男女共同参画青少年課 課長 菅原由紀  
研究メンバー：菅原由紀、佐々木繭子(盛岡市役所市民部男女共同参画青少年課)  
技術キーワード：社会的ひきこもり、社会復帰、事例

## ▼研究の概要(背景・目標)

現代、日本ではひきこもりに対する社会的関心が集まっている。出現率は地域により報告が異なるが、ひきこもりに対しては内閣府や厚生労働省の施策等により支援の整備が進められてきた。たとえば、2009年に成立した「子ども・若者育成支援推進法」によって地域での支援体制の構築が求められ、2010年に出された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」により、その地域での支援を担う機関として、医療機関、保健機関、福祉機関、NPOなどの民間組織が位置づけられている。ひきこもりは「様々な原因の結果として社会参加を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」と定義され、特定の疾病状態や診断を示すものではない。したがって、個人のニーズに合わせた柔軟な支援が必要である。本調査では、ひきこもりから回復した元当事者8名からインタビューをおこない、回復過程を参考にロールモデルとして冊子を作成し、早期の相談を啓発することを目的とした。次に1例を示す。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

- ・発達障がいと診断されたものが今回のインタビューでは多かったが、診断されたがゆえに支援につながった可能性もある。
- ・今後、作成した冊子を活用しひきこもりについての啓発セミナーを実施し早期の相談につなげたい。

## 事例1

### おとなしい性格、友人が少ない(幼少期～高校卒業)

おとなしい性格で、子どもの頃から友人は少なかった。小学校時代は、放課後に友達と遊ぶこともなく自宅でTVを見て過ごすことが多かった。学校にあまりなじみず高学年になると欠席しがちになった。中学校に入学しても状況は変わらず保健室でほとんどを過ごした。高校へ入学したが、休みがちになり2年生で退学。その後、2年ほど家で過ごしていたが、資格を取得しようと19歳で通信制高校に入学し、21歳で無事に卒業した。

### 高校卒業後ひきこもる(高校卒業後～ひきこもり期)

在学中には就職活動をしなかったため、卒業後は自宅でTVやインターネットをして毎日を過ごす。外に出たい気持ちと家に居たい気持ちの間で揺れ動き、どうしたらよいか分からず、ほとんど外出せず6年間ひきこもった。近所の人の目が気になり、後ろめたく、家族にも申し訳ない気持ちだった。

### インターネットで自分の状態を相談(動き始め～発達障がいの診断)

20代後半、自らインターネットのチャットなどで自分の状態を相談し、精神保健福祉センターに相談したほうがよいとアドバイスをもらう。30歳を目前に自分でも状況を変えたいという気持ちがあり、相談に行ったところ、メンタルクリニックの受診を勧められ、診察の結果「発達障がい」と診断された。

### 障害福祉サービスによる就労支援

主治医の勧めで障害者手帳を取得し、障害福祉サービスで就労支援を受けることを決意。地域にある障がい者の就労支援事業所を紹介されて見学に行くと、自分と同じような悩みがある人が通っていた。「ここなら自分もがんばれる」と感じ、2年間通う中で、働くことに対するイメージが変化。「失敗したら怒られる」というイメージから「自分でも仕事ができるんだ」「楽しいな」という気持ちに変わった。

### 一般就労へ

一般企業での実習を終了し、人や社会に対する恐怖心が和らぎ、働きたい気持ちが高まった。就労支援事業所の紹介により無事にパートスタッフとして一般企業で働くことができた。